私の保育

新井　芳

いつのことだったか、友だちと話をしていて「あなたの一番大切にしていることはどんなこと？」と聞かれたことがあります。「やっぱり『思いやり』ということじゃないかしら」と答えて、私の保育にも通っていることではないかしらと最近思うことがあります。

お弁当のあと、お部屋を掃除している時のことです。ある子どもが庭からもどってきて、部屋をのぞいて私を見ると、「先生、大変だねえ」と言うと、「ぼくも手伝っていい？」とほうきを持ってきました。「ええ、いいわ。じゃお願いしようかしら」子どものことですからまだうまくはくことができないのですが、それでも一生懸命にごみを集めています。そのうちにそれに気づいた子どもたちが一人、二人と集まり、最後のころには、ほうきやちりとりのとりっこになってしまいました。今では、私が掃除を始めるときまって何人かの子どもたちが手伝ってくれるようになりました。私は大変助かると同時に、どんな小さな子どもにも他の人のことを思う心が芽ばえていることをうれしく思い、美しく感じられました。そして、そろそろ当番制にしなくてはと思い始めているこのごろです。

子どもは非常に自己中心的です。自分の意見が通らないとけんかになることもあり、涙をこぼしたりすることもしばしばあることです。ところが、考えてみますと、私たちおとなの世界はあまりにも私利私欲の面が多いように思われます。核家族がふえてきていること一つみてもそう言えるのではないでしょうか。もし自分が年寄りになった時、一人ぼっちになってしまったらどんなにさびしいものかと思います。やはり自分の育てた子どもや孫と一緒に笑うことの多い日々であってほしいと思い

ます。それに何十年も暮らしてきたお年寄です、生活の知恵だだとか、見習うべき点は若い私どもにはたくさんあるのではないかと思われます。このごろ保育していてふと感じた『思いやり』ということです。

また、私のクラスは「先生」「先生」で大変です。先生が大好きで先生の言うことは絶対なんです。これはお母さまからのお話を聞いてわかったことなのですが、私もこれにはびっくりしたくらいでした。今、私のクラスでは鉄棒がはやっているのですが、「先生！　見て見てホラ」と言って一人一人が見てほしくてその声が絶えません。見ると、一人一人が自分で考え出したやり方を競いあっています。それをやるたびに「すごいわねえ」「あら、おもしろいのねえ」「へえ、かわったの考えたのね」と一言一言、言うことに忙しい私です。

先生が大きな存在になっていることは家に帰ってからも続くようです。家へ帰ったら手洗い、うがいをしましょうと約束してあるのですが、よくやっているようです。それからちょっとした手あそびなど、私そっくりに表情をまねてやってみせるそうです。まあこれは先生絶対というよりは、何よりも園生活が楽しいものだということでしょうか。

次に私のクラスは遊びが非常に活発なクラスだということです。ある日のこと、もうそろそろ皆が園の生活に慣れ、遊べない子どももいなかったので、今日こそはみんなと一緒に遊べるわと思い、男児何人かがイスを並べて何やらやっているので「先生も仲間に入れて」というと「いいよ、いいよ」と入れてくれました。「これはおもしろそうね」「バスだよ」「どこ行き？」「どこへ行きたい？」「森！」「じゃあ森をつくりましょうよ」そして茶色の色画用紙で筒をつくり、緑色の色画用紙でちぎって筒にさし込み、でき上がりです。すると今度は森に住んでいる小人だとかヘビだとか、それじゃあ前につくったトランシーバーも持っていこうとか、望遠鏡もつくろう……そしてやっと森ができました。

今度はバスに食料を積み込みはじめました。おもちゃというおもちゃの箱を運び込み、うしろに積み込みます。そのうちに、「私も入れて」「私も入れて」とその日はとうとうクラス全員のキャンプごっこになってしまいました。一人、とても統率力のある子どもがいて、団長さんになり、命令したりして指揮をとり、とても愉快な一日になりました。その遊びはとてもおもしろかったらしく、子どもたちの間で人気があり、その後、何日か続いたようでしたけれども、いつもこうした明るい日ばかりではありません。誰ちゃんと誰ちゃんがけんかした、けがし

た、気持ちが悪い、帰りたくなっちゃったとか、年少の一学期ですのでまだまだ不安定な面があります。子どもの活動は、それぞれ特徴をもって流れています。どの遊びも大切にしなければならないと思いながら、そうした事故におわれてしまうこともしばしばあります。

ある女の子で、入園当初、お家へ帰りたいと言って泣く子がいました。どうしようかと思っていろいろ考えてみましたが、朝、机をふいたりしているとそばにくっついてくるので、お手伝いをしてもらうことにしました。そのことがとても気に入ったらしく、お手伝いをすることに安定した子もいました。

また、入園式の次の日から二日間ワーワー泣いていた子は、園のようすがわかったのか、次の日からはケロリとしてあばれまわり始めました。「今度は何をするの?」「次は何をするの?」と不安そうにたずねる子どもには、次はこうするのよ、とあらかじめ教えてあげると安心した気持ちになる子もいました。そしてクラスの皆がはじめのうちは家にあるのと同じような、ままごと、絵本、ブロックなどで遊んでいましたが、私はなるべく「物」で遊んでばかりいないで友だちどうし、肌と肌とをふれあって遊ぶように心がけました。石ころ一つ、うた一つでも大勢が遊べるようになってほしいと願っていましたから……。

そのうち、誰ちゃんの鬼とか、誰ちゃんのおとなりよとか遊びの中で名前を覚えるようにしていますと、気の合った友だちが一組、二組とできはじめ、幼稚園生活に根がはっていったようです。

そろそろ園生活にも慣れてきたころ、私はそれぞれの子どもに『自律』の精神を身につけたいと思い、ある日、音楽リズムの時間に、「おたまじゃくしの散歩」と題して、昼寝をする時に、洋服をぬいでみることにしました。さあ大変です。いすの下に靴をしまい、一枚一枚ぬいだ洋服はきちんとたたんで重ねます。もう、へやじゅうが大さわぎです。けれども、二歳でもうぬいだり着たりができるのですからできないことはないとやらせてみました。皆、真剣な顔つきです。中にはやはりできない子どもがいて、友だちに手伝ってもらいながらの子どもも何人かいました。自分のことが一人でできるということはとても自信がつくようです。できた子どもは満足感で意気揚々としています。それからは家では自分でぬいだり着たりすることを約束し、お母さま方にも協力していただきました。子どもたちに自信をもった生活をさせていきたいと願っています。

次に大切にしていることは『体力』です。地方の恵まれた環境の子どもたちに比べ、都会の子どもはどうしても体力があり

ません。気管支炎、ぜんそく、細い腕、足を何とかして直したいものと、天気のよい日には、おおいに庭で遊ぶようにしています。かけっこ、鉄棒、ハンカチとり(ジャンプ)、鬼ごっこ、ボール遊び、なわとび、ゴム段、あらゆる方法を使って体をたくさん動かして遊ぶよう心がけています。それが子どもにも楽しいらしく、一ときもじっとしていられないようです。暑くなって汗をかくようになっても、少し涼しい所で休むように言っても、ちょこっと休んで、すぐまた、飛び出していくしまつです。おとなになってから体力をつけようとしてもなかなか大変なことです。やはり若いころ、鍛えた体は、後々までも宝となるものと思います。

次に大切にしていることは『童話』です。家庭訪問の時に必ずお母さまにお話することの一つです。幼児の心にぴったりとしみ込んでいくお話は、もうおとなになってからでは養えない心です。やさしい気持ち、親切な気持ち、いたわりの気持ち、その他たくさんの心が童話には折り込まれています。お家ではお昼寝や夜寝る前にお母様の生の声でお話すると、疲れがとれると同時に、快く眠りに入れることからも、ぜひにとすすめています。園ではお帰りの時、ちょっと時間をつくって聞かせてあげています。「大きなかぶ」のお話などは大好きで「ウントコショ、ドッコイショ!」と皆で声を合わせてかけ声をかけます。こうして童話からいろいろ夢をふくらませて遊びにも発展させていく要素にしているようです。幼児の生活は現実ばかりでは生活していけない夢の想像の中で生きていることが多いようです。

最後に、私はうたが大好きです。子どもにもいいうたがあると、さっそく教えています。うたは、うれしい時も悲しい時も、人の心をなぐさめてくれたり、はげましてくれたり、ふしぎな力をもったものだと感心しています。台所などで口ずさみながら働くお母さまのうたや、木やりうたのように仕事と共にうたううた。子どもの生活でもそうです。鼻うたまじりでトントン積み木を組み立てたり、でき上がった積み木のお城で肩を組んでうたっているグループ、そうかと思うと悲しいピアノのメロディーを耳にして「何だかさびしい曲だね」とつぶやく子ども、うた一つで遊べるもの、いろいろとあげてみますと、私たちの生活をどんなに潤いのあるものにしてくれることでしょうか。

(十文字幼稚園)